

非定型うつ病の新規療法及び発症予防プログラム開発に向けたバイオマーカーの探究

名前 工藤 隆司

所属 弘前大学医学部附属病院 麻酔科

専門分野・キーワード：うつ、ペイン

自己紹介：非定型うつ病や難治性うつ病、うつ症状を併発する疼痛の発症及び治療に関する臨床・基礎研究を行っています。



非定型うつ病(いわゆる、新型うつ病)はうつ病患者のうち36%程度を占めると考えられている。患者はうつ症状を示すが、好きなことでは元気になるため、怠けていると誤解されやすく、周囲の人からサポートを受けにくい。また、過食や過眠を伴い、慢性化しやすいため、将来的に糖尿病や高血圧、肥満等の生活習慣病の発症リスクとなる。非定型うつ病患者の25-28%が生活習慣病を患っているとの報告もあり、症状の重症化や慢性化を防ぐ適切な治療法及び予防法の確立、周囲のサポートが必要である。我々は、弘前 COI の岩木健康増進プロジェクトで得られたビックデータを用いて、健康診断参加者における抑うつ傾向と生理学的データ、生活習慣病歴、炎症関連物質の関連を解析した結果、抑うつ傾向の高さとレプチンの上昇・G-peptideの低下が関与することを発見した。レプチンやG-peptideは食生活に関連する代謝関連物質であり、生活習慣病と関係することが知られている。興味深いことに、非定型うつ病患者は血中レプチン濃度が高値を示し、軽度～中程度のうつ症状が多いことが分かっている。我々の研究結果と併せると、健康な状態から非定型うつ病が発症する過程にレプチンやG-peptideが関与することが示唆される。

現在、我々は未病の抑うつ傾向から非定型うつ病を予見するバイオマーカーとしてレプチン・G-peptideが有用かうつ病患者及びボランティアを対象に検討を進めている。また、周囲のサポートも含めた食事療法や運動等でレプチンやG-peptideの血中濃度をコントロールし、抑うつ傾向に改善がみられるかも今後検討したい。レプチン・G-peptideを非定型うつ病発症の早期予見バイオマーカーおよび早期発症予防ターゲットとして確立出来れば、非常に利用価値が高いと考えられる。